

芸術鑑賞における作品解説の属性判定プロセスの記述

A proposal for the process of determining attribute of the art description on the art appreciation

志水 翔之^{*1}, 中平 勝子^{*1}, 北島 宗雄^{*1}

Shono SHIMIZU^{*1}, Katsuko T. NAKAHIRA^{*1}, Muneo KITAJIMA^{*1}

^{*1} 長岡技術科学大学,

^{*1} Nagaoka University of Technology,

E-mail: s111045@stn.nagaokaut.ac.jp

あらまし：芸術鑑賞の仕方は鑑賞者の主観や経験に強く依存する。芸術作品の作品解説には視覚可能な客観的属性と感情や印象による主観的属性に関する記述が混在する。作品解説が、鑑賞者が作品について理解を深める、という鑑賞教育へ繋がる役割を果たすためには作品解説が客観的属性と主観的属性を適切に表現する事が必要である。しかし、同じ作品解説から属性を判定するプロセスは鑑賞者によって異なる。本稿では、作品解説を鑑賞者が見た時に、客観的属性と主観的属性を判定する際のプロセスを記述した。

キーワード：芸術鑑賞, 作品解説, 顕在的属性, 潜在的属性, 背景情報, 鑑賞教育

1 はじめに

芸術鑑賞の仕方は鑑賞者の主観や経験に強く依存する。そのため、芸術鑑賞における作品解説は鑑賞者の自由な芸術鑑賞を阻害してしまう可能性がある。しかし、鑑賞者の芸術に対する知識や経験によっては作品の見方が分からない状況が起き得る。通常は“分からないなりにまず観る”が芸術鑑賞の基本であるが、鑑賞教育という立場を鑑みた際、作品解説は一定の役割を果たしうる。

日本美術教育学会が小学校・中学校美術科の教員を対象に行った「図画工作科・美術科における鑑賞学習指導についての調査」[1]において、学校教育における美術は、芸術作品の制作を重視されており、芸術鑑賞を軽視する傾向にあるとしている。この原因として、「鑑賞学習指導の取り組み」の回答で積極的と消極的の回答が二分している。消極的な理由として、「鑑賞に関する知識が乏しい」という回答が小学校 37.7%・中学校 24.9%と教員自身が問題を抱えているとしている。また、鑑賞学習に必要な改善点として「鑑賞の学習指導に関する現職教師の研究・研修」の項目で小学校 47.8%・中学校 43.3%が回答している。

本研究では、教育機関における鑑賞学習指導を深化させる一つの方法として、鑑賞活動を認知的に理解する試みを通じて適切な鑑賞教育支援についての可能性を考える。その第一歩として芸術鑑賞と作品解説の関係を取り上げる。

吉村 [2] は、絵画の作品解説が絵画中に知覚可能なものから展開されていけば、絵の前に立つ鑑賞者はその存在に目を向け、それを踏まえた解説内容に納得、疑問を持ちやすいとし、作品解説を作品中に知覚可能な顕在的属性、感情や印象など知覚不可な潜在的属性、作者や作品の製作年などに関する情報の背景情報に分ける事の重要性について説いている。また、実際に利用されている解説文から鑑賞者が解説文を各属性に仕分ける作業がどの程度可能であるか実験を行い、現行の解説文でも鑑賞者と解説作成者の間に温度差が生じているという

問題を指摘している。そのため、作品解説の内容を各属性に分けるという作業を行うことで、作品解説の改善の手掛かりとなり、芸術作品を理解するための基準となる。この基準が、鑑賞教育における評価・指導の改善や、鑑賞者の芸術鑑賞を行うために必要な知識を深める事に繋がると考えられる。

本稿では、鑑賞者が芸術作品と作品解説を見て、作品解説に書かれた内容を各属性に判定するプロセスを記述する。

2 文章理解と作品解説における属性

人はある対象を見ようとする際、今までの経験や知識からそれが何か判断する認知的枠組みを持っており、その認知的枠組みをベースとして見ている。また、人は文章を読んだ際に個々の文を、意味を示す知識の基本単位である命題に変換し、短期記憶内に命題ネットワークが構成する。個々の命題に関連した情報を長期記憶の知識ベースから検索を行い、検索された情報や推論で得られた情報から精緻化命題ネットワークを構成する。そこから文脈的から一貫性を持つ意味表象を形成する[3]。以上のことから類推されるのは、同じ作品、解説文であっても鑑賞者がもつ経験や知識により各属性を判定するプロセスは異なるであろう。

本稿では、作品解説に対する属性判定として、吉村の提案した3つの属性を規定する。

- 顕在的属性：色や形など作品中に知覚可能なもの。物理的、客観的性質。
- 潜在的属性：目で直接見ることの出来ない感情や印象など知覚不可なもの。鑑賞者自身の主観的性質。
- 背景情報：作者や作品の製作年などに関する情報。

上記の属性は、どの属性が作品解説として相応しいかを示すものではなく、作品解説の作成者が自身の書いている文章がどの属性の観点から書いているかを自覚するための基準として扱われる。

3 属性判定プロセス

次に、以下の変数を用いて作品解説の属性判定プロセスを記述する。

- 解説 T : $T = \{T_1, T_2, T_3, \dots, T_n\}$
 - T_i : 解説 T の解説要素 (String)
 - i : $1, 2, 3, \dots, n$ (自然数)

解説 T は作品解説の全体を表し、それを任意の n 個に区切った文字列を解説要素 T_i とする。また、一つの作品につき一つの解説 T が存在している。

- A_i : 判定結果(Integer)
判定結果 A_i は、鑑賞者が解説要素 T_i がどの属性であるか判定し、その結果の属性が格納される。格納される属性は、「顕在的属性」「潜在的属性」「背景情報」「判定不可」のいずれかである。判定不可は鑑賞者が該当する属性がどれかを判断できない際に格納される。また、既に属性判定を行った解説要素 T_i に対して属性判定は行わないとする。
- Z_i : 属性判定終了フラグ(Boolean)
属性判定終了フラグ Z_i は初期値に全て false が設定されており、鑑賞者が解説要素 T_i に対応する属性判定 A_i を出力した時 true となる。全ての属性判定終了フラグが true になった時に処理が終了する。

3.1 鑑賞者の置かれた環境

鑑賞者は次の制約の下、属性判定を行うとする。鑑賞者は呈示される芸術作品、作品解説については初見であるが、属性判定を行うために必要な各属性の詳細について事前に説明を受けている。そのため、鑑賞者は作品や解説についての予備知識や記憶は無いが、各属性の特徴は理解しているため属性判定が可能となっている。また、鑑賞者は解説要素 T_i の属性判定を行う順番は、先頭から順に属性判定を行うとする。

3.2 鑑賞者の活動

鑑賞者は、解説要素 T_i を読んでから属性判定を行うまでのプロセスは以下の活動から構成される。

- Act1: 解説要素 T_i の入力
- Act2: 芸術作品の入力
- Act3: 属性判定
- Act4: 属性判定の出力
- Act5: その他

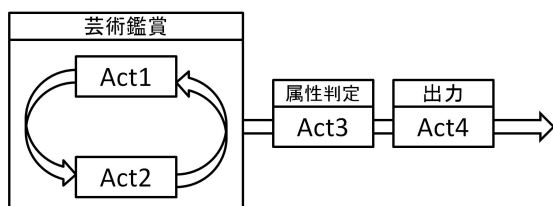


図1 属性判定プロセス

図1に、属性判定プロセスを示す。鑑賞者は解説要素 T_i のみを見る、もしくは解説要素 T_i と芸術作品を交互に見る事で解説要素 T_i がどの属性の要素を持っているかを判定する。そして、判定した属性を出力する。

Act1: 解説 T から解説要素 T_i を認識し、解説要素 T_i に対して文章理解をする。

1. 解説要素 T_i を意味を表す命題に変換し、命題ネットワークを構成する。
2. 長期記憶から個々の命題に関連した情報を検索する。
3. 検索された情報や推論から得られた命題が付加され精緻化命題ネットワークが構成される。
4. 文脈的に共起しているものが活性化、矛盾を含んだ要素が排除され、一貫性を持つ意味表象を形成する。

Act2: 芸術作品を認識し、作品中の特定の箇所を探索する。探索する箇所の例として、解説要素 T_i が示していると考えられる箇所の探索、鑑賞者自身が興味を持つ箇所の探索、全体や一部を見渡すなどが挙げられる。

Act3: 解説要素 T_i が各属性の要素を持っているかを判定する。判断する要素として、解説要素 T_i が示す箇所が作品中で知覚可能なものであった場合は、顕在的属性と判断する。解説要素 T_i が感情や印象、または解説文を書いた人の主観的な文であった場合は潜在的属性と判断する。解説要素 T_i が作品の製作者に関する情報や制作年などの情報が記述された場合は背景情報と判断する。上記のような基準から解説要素 T_i が各属性のどれであるかを判断し、その属性を判定結果 A_i に格納する。

Act4: 解説要素 T_i に対応する判定結果 A_i を出力する。出力する際に解説要素 T_i に対応する属性判定終了フラグ Z_i が true となる。

Act5: 鑑賞者が属性判定を行う際に、作品、解説以外のモノを見ている、他の事について思考しているなど、上記の活動に関係ない行動があるため、これらは全て一括して「その他」に分類した。

4 まとめ

本稿では、作品解説が果たす役割が鑑賞教育へ繋がるための手掛かりとして、鑑賞者が芸術作品と作品解説を見て、作品解説に書かれた内容について属性判定を行う際のプロセスを記述した。

参考文献

- [1] 日本美術教育学会研究部, "図画工作科・美術科における鑑賞学習指導についての調査", (2003).
- [2] 吉村 浩一, "絵画に顕在するものを展示解説文に生かす意義", 展示学 50号, pp 42-51, (2012).
- [3] 箱田 裕司, 都築 誉史, 川畑 秀明, 萩原 滋, "認知心理学", 有斐閣, (2010).